

【基調鼎談】

畑 本 裕 介 (はたもと ゆうすけ) 同志社大学政策学部教授

慶應義塾大学法学研究科後期博士課程単位取得退学、博士（公共政策学）。山口学芸大学専任講師、山梨県立大学准教授等を経て、2016年10月より同志社大学政策学部准教授、2018年4月より現職。専門は、社会政策学、福祉社会学、社会福祉行政論。福祉政策に関わる理論的・制度的研究が主な業績だが、生活構造論についても研究している。社会貢献活動として現在、2020年より京都府国民健康保険団体連合会介護サービス苦情処理委員会委員、2022年より京都自立就労サポートセンター推進委員会委員、2024年より社会福祉士・精神保健福祉士国家試験試験委員、京都府国民健康保険運営協議会委員長等。著書に『再帰性と社会福祉・社会保障－「生」と福祉国家の空白化－』（単著、生活書院、2008年）、『新版 社会福祉行政－福祉事務所論から新たな行政機構論へ－』（単著、法律文化社、2021年）、『これからの福祉政策－ローカルの視点から考える－』（共著、有斐閣、2024年）等。

寺 本 晃 久 (てらもと あきひさ) NPO 法人 IL&P アシスト理事長、介助者

東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了。1990年代半ば頃より、知的障害のある人の権利主張の活動や、自立生活の支援を行ってきた。2004年に介助派遣事業所 IL&P アシスト（日野市）を設立。以来、主に自立生活をしている・グループホームで暮らす知的障害のある人の介助や、その他生活に必要な支援を行ってきた。暮らしには楽しいことも難しいこともあり、その調整を毎日のように続けている。時折、そこで考えたり調べたことを文章に書かせていただいている。

共著に『ズレてる支援！－知的障害／自閉の人たちの自立生活と重度訪問介護の対象拡大－』（生活書院、2015年）、論文に「移動と抵抗－小田さんの話－」（『障害学研究 20 障害学の展開－理論・経験・政治－』（明石書店、2024年）等。

三 井 さ よ (みつい さよ) 法政大学社会学部教授

1973 年、石川県生まれ。2003 年、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（社会学）。2004 年より法政大学社会学部専任講師（2014 年より現職）。専門は社会学。単著に『知的障害・自閉の人たちと「かかわり」の社会学—多摩とたこの木クラブを研究する—』（生活書院、2023 年）、『ケアと支援と「社会」の発見—個のむこうにあるもの—』（生活書院、2021 年）、『はじめてのケア論—新たなケアと支援のしくみをつくるために—』（有斐閣、2018 年）、『看護とケア—心揺り動かされる仕事とは—』（角川学芸出版、2010 年）、『ケアの社会学—臨床現場との対話—』（勁草書房、2004 年）等。共編著に『はじめての社会調査』（2023 年、世界思想社、）、『支援のてまえて—たこの木クラブと多摩の四〇年—』（生活書院、2020 年）、『現代社会研究叢書 6 ケアのリアリティー境界を問いなおす—』（法政大学出版局、2012 年）等。雑誌『支援』（生活書院から年 1 回刊行）の編集委員。

【講座①】

川 村 岳 人 (かわむら かくと) 立教大学コミュニティ福祉学部准教授

日本福祉大学大学院福祉社会開発研究科博士後期課程修了。博士（社会福祉学）。専門は地域福祉、居住福祉。沖縄県庁、健康科学大学、大分大学を経て、2021 年 4 月より現職。社会的孤立や生活困窮の問題に関心を持っており、こうした問題が先鋭的に現れ、一部ではスティグマ化も指摘されている大規模な公営住宅団地に焦点を当て、質的調査・量的調査を行いながら地域福祉実践のありようを研究してきた。最近、家を持たない人に対する居住支援にも関心を広げている。

著書等に『新しい地域福祉の「かたち」をつくる—「福祉コミュニティ」概念に基づく政策・実践の統合—』（共編著、ミネルヴァ書房、2024 年）、「公営住宅の入居者による自治会活動への参加・不参加を規定する要因」（『居住福祉研究』32 号、日本居住福祉学会、2022 年）等。

大 場 信 一（おおば しんいち）社会福祉法人北翔会理事長兼総合施設長

1974 年大学卒業後、北海道職員となり、中でも勤務年数の長い児童相談所をはじめ、北海道生活福祉部、福祉事務所、児童自立支援施設等に勤務。北海道中央児童相談所長退職後、2010 年より公益財団法人鉄道弘済会札幌南藻園長として勤務、2018 年より同園参与。2018 年に社会福祉法人北翔会総合施設長兼札幌すぎな園統括施設長就任、2020 年より同法人理事長に就任。社会福祉法人全国社会福祉協議会全国児童養護施設協議会の常任協議員、研修部長、副会長を担う。また、北海道福祉サービス第三者評価事業推進機構第三者評価機関認証委員会及び第三者評価基準等委員会各委員、NPO 法人子どもシェルターレバピリカ理事、北海道ファミリーホーム協議会顧問、公益財団法人北海道新聞社会福祉振興基金社会的養護児童進学・自立支援金運営委員会委員等に、設立時からかわり現在に至る。

秋 山 紅 葉（あきやま くれは）NPO 法人場づくりネット理事、「やどかりハウス」コーディネーター

1984 年東京都にて劇集団“予兆”に所属していた両親のもとに出生。青年期には南インドの先住民の村に滞在したり、日雇い労働者の街・山谷で路上生活者や簡易宿泊所の女性たちと寝食を共にした。2012 年から 2023 年まで、独立行政法人国立病院機構小諸高原病院で精神障害者の地域移行支援と当事者活動に取り組み、地域で WRAP（ラップ：元気回復行動プラン）の普及活動を展開。2019 年から現在にかけて、制度では助けられない人々の声を頼りに、文化資源を生かした関係性モデルを場作りネットにて実践。長野県上田市を拠点に、街の中に雨風しのぐ「助かる場」を作ることで繋がり合う文化を作っていこうとする活動「のきした」、誰でも 500 円で泊まれる「やどかりハウス」、文化資源で出番を作る「のきした仕事事業」、みんなで子どもを見守る「ジジバババンク！」などを運営。はれラジ（FM ラジオ）の番組パーソナリティ、WRAP ファシリテーター、精神保健福祉士、公認心理師。

荒 井 佑 介（あらい ゆうすけ）NPO 法人サンカクシャ代表理事

1989 年埼玉県出身。新宿駅で路上生活者と仲良くなったことから、2008 年よりホームレス支援に携わりはじめる。子どもの貧困問題に関心を抱き、2011 年から生活保護世帯の中学 3 年生を対象とする学習支援に携わる。豊島区（池袋）や足立区で生活困窮や不登校、非行などの課題を抱える子ども・若者と関わりはじめる。2013 年に株式会社パソナに入社し、販売員や営業職の派遣の営業に従事。2014 年には新事業開発室にてニート・フリーター就労支援新規事業の立ち上げに従事。中学 3 年生の学習支援に長く関わっていたこと、高校に進学しても、中退・妊娠出産・就職等でつまづく子どもや若者に多く出会ってきたことから、2019 年にサンカクシャを立ち上げた。

【講座②】

堀 田 聰 子 (ほった さとこ) 慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科教授

東京大学社会科学研究所特任准教授、ユトレヒト大学訪問教授等を経て 2017 年 4 月より現職。博士（国際公共政策）。社会保障審議会（介護給付費分科会及び福祉部会）、認知症施策推進関係者会議等において委員。一般社団法人人とまちづくり研究所代表理事、NPO 法人日本医療政策機構等において理事。中学生の頃より、おもに障害者の自立生活の介助を継続、より人間的で持続可能なケアと地域づくりに向けた移行の支援および加速に取り組む。2018 年に仲間たちと「認知症未来共創ハブ」を始動。認知症のある方の思いや体験・知恵を中心に、本人とさまざまな関係者とともに、安心して認知症になれる未来を探索している。寛裕介著『認知症世界の歩き方』（ライツ社、2021 年）、同『認知症世界の歩き方 実践編』（issue+design、2023 年）を監修。アラン・ケレハー著『コンパッション都市—公衆衛生と終末期ケアの融合—』（慶應義塾大学出版会、2022 年）を共監訳。

大 胡 田 誠 (おおごだ まこと) おおごだ法律事務所代表弁護士

1977 年静岡県生まれ。先天性緑内障により 12 歳で失明する。慶應義塾大学法学部卒業、同大学院法務研究科修了。2006 年に司法試験に合格し、2007 年弁護士登録。全盲で司法試験に合格した日本で 3 人目の弁護士になる。2019 年、おおごだ法律事務所開設。一般民事事件や家事事件、企業法務に加え、障害者の人権問題にも積極的に取り組んでいる。著書『全盲の僕が弁護士になった理由—あきらめない心の鍛え方—』（日系 BP 社、2012 年）は、2014 年ドラマ化され大きな反響を呼んだ。その他の著書に『今日からできる障害者雇用』（共著、弘文堂、2016 年）、妻・大石亜矢子との共著『決断。—全盲のふたりが、家族をつくるとき—』（中央公論新社、2017 年）、『コロナ危機を生き抜くための心のワクチン—全盲弁護士の智恵と言葉—』（単著、ワニブックス、2020 年）等。

坂 本 歩 (さかもと すずむ) NPO 法人里親ひろばほいっふ理事

産まれてすぐに乳児院に入所し、児童養護施設を転々としながら小学 1 年生の夏に里親家庭に措置される。措置延長してもらい 20 歳まで里子として過ごし、2016 年に養子縁組をする。2022 年に里親登録が認められ、現在はファミリーホームの養育者として、母と一緒に 4 名の里子を養育している。学生時代から当事者活動に積極的に取り組み、社会的養護の現状や制度に対して声をあげてきた。社会的養護経験者の居場所として里子の会を地元八王子で作り、代表を務めている。また、地域の子どもの居場所事業や子ども食堂などにも取り組んでいる。ハートネット TV (NHK) やノーナレ (NHK)、Colorful ライフラリー人生ってみんな違ってスバラシイ (日本テレビ) 等にも取り上げられ、メディアでも発信している。

和久井 みちる (わくい みちる) 一般社団法人社会的包摂サポートセンター相談支援コーディネーター

大学の文学部在学中、手話サークルに誘われたことをきっかけに福祉に関心を持つ。大学卒業後、障害児の施設、体に障害を持った方の父母の会に勤務、児童館の児童厚生員を経て、自治体職員となり福祉現場で勤務。7 年間の在職中に介護支援専門員の資格を取得。その後、NPO 法人にてケアマネジャーとして働く。その最中、ドメスティック・バイオレンス (DV) 被害に遭い、うつ病にて失職。3 年半、生活保護制度を利用して生活した。離婚成立後、シングルマザーとして子育てをしながら相談支援現場に復帰。ジャンルを問わない相談のコーディネーター、行政委託の支援者支援事業、人材育成等に携わる。現場有志の事例検討会「支援者ネット東京」共同世話人。単著に『生活保護とあたし』(あけび書房、2012 年)。その他『また、福祉が人を殺したー札幌姉妹孤立死事件を追うー』(鼎談、あけび書房、2012 年)、『間違いだらけの生活保護バッシングーQ&A でわかる 生活保護の誤解と利用者の実像ー』(生活保護問題対策全国会議編、明石書店、2012 年) 等。

【記念講演】

五十嵐 大 (いがらし だい) 作家

1983年宮城県塩竈市生まれ。耳のきこえない両親を持つ「コーダ」として生まれ育つ。『しくじり家族』（CCCメディアハウス、2020年）でエッセイストとして、『エフィラは泳ぎ出せない』（東京創元社、2022年）で小説家としてデビュー。2024年9月、『ろうの両親から生まれたぼくが聴こえる世界と聴こえない世界を行き来して考えた30のこと』（幻冬社、2021年。その後、『ぼくが生きてる、ふたつの世界』と改題し文庫化）を原作とした実写映画「ぼくが生きてる、ふたつの世界」が公開される。その他の著書に『聴こえない母に訊きにいく』（柏書房、2023年）、『「コーダ」のぼくが見る世界ー聴こえない親のもとに生まれてー』（紀伊國屋書店、2024年）等。また、ライターとしてさまざまな社会的マイノリティへの取材、執筆も行っている。